

2 南相馬市小高区②

第三回小高視察

2016年9月17日

■高校生プロジェクト集中WS

高校生プロジェクトでは、高校生を中心に11月12日(土)に行われる南相馬市長への提案に向けて、3つの課題に取り組んでいる。

- ①高齢者や一人暮らしの方のサポート、地域の方との交流
- ②空き地・空き家の活用(蔵の活用)
- ③通学路を中心とした子供の環境

私たちは、空き地空き家の活用について高校生と一緒に考察した。

■蔵の見学

まず、高鳥家の蔵を見学した。高鳥家の蔵は、小高への入口である上町の通り沿いに位置する。

敷地の周りをレンガの壁が囲い、趣がある。日本の伝統的な土蔵とは異なる魅力を感じた。屋上の装飾も規則性のある凸凹が、建物の存在感をより引き立てている。1階の壁はコンクリート打ち放し、天井は7本の木材の梁が均等に並び、1階とは異なり2階は、壁は白塗り、天井にはシャンデリアの名残を感じ、洋風に仕立てられていた。現在の蔵は、倉庫として使用されている。



屋上からは、四季折々の景色、春は美しい桜、夏は大輪の花火、冬は満天の星空が楽しめる。

■蔵の活用についてWS

高鳥さん夫婦の若い人に蔵を利用してほしいという意向により、高校生が主体となって利用方法について意見交換をした。放課後に、友人と会話や食事をしたという高校生の希望から様々な意見が出された。



■WSでまとめた提案

次の3案にまとめた。

- ①フリースペースにして友達と食事や会話を楽しむ。蔵の持つ音が響く特性を利用して演奏会を開く。
- ②蔵の歴史の展示、カフェや食堂、話せる図書館や古本屋を造る。図書館や古本屋は、高鳥家にあるたくさんの書物を活用しても良いとのこと提案された。
- ③屋上でBBQや天体観測会等を催す。

■地元の高校生と交流



夕食時に高校生とともにカレーを作って食べた。高校生が日常生活等について、気さくに話してくれ、交流を深めることができた。自身の高校時代を振り返ると、小高の高校生のように自主的に地域活動をしたり、地元の未来について友人と真剣に語り合うという機会がなかったので刺激を受けた。

■まとめ

小高の復興は始まったばかりである。しかし、今回高校生プロジェクトに参加して、高校生一人一人の復興に対する思いはとても強くと感じた。高校生のプロジェクトの一助となれたことが大変心嬉しい。



▲高鳥家の蔵の前で高校生たちと撮影



▲11月12日に行われる市長へのプレゼンテーション
(広報みなみそうま 10月号)

小高の現状

避難指示解除準備区域が解除されてから早3ヶ月が経過しているにも関わらず、小高で生活を始めた住民は800人に留まり、活気が無い。小高の原発に対するイメージが払

拭できていないことや、震災から5年半が経過してしまっているため、生活基盤が避難先で構築されており、なかなか人が戻ってこない等の問題がある。

3回視察して分かった小高

人がすぐに住めるように等という上辺だけの復興ではなく、これから小高を使っていく世代の意見を取り入れた復興をしようとしていることが、小高の特徴である。復興事業には予算等のお金が絡むことが多く、若い人は参加し難い。しかし、小高では、高校生を南相馬市役所や小高復興デザインセンターがバックアップする体制ができて上がっている。小高に戻ってくるきっかけとなる「おだか秋まつり(10月15・16日)」では、高校生が主体となって小高の良さをPRするカフェが開かれる。また、高校生がこれまで活動してきたことや、これからの展望について南相馬市長に直接提案する機会(11月12日)が設けられている。

また、小高では東京大学をはじめ様々な大学が活動を行っている。我々も、これまでの活動を通して、小高の復興の一端に触れることができた。これは、小高が開かれた復興を行っていることを示している。

DRMから見た小高の課題

小高は地震、津波、そして原発の被害を大きく受けた。しかし、現在は除染作業も進んでおり、現在の空間放射線量は0.09μSv(2016年9月6日、小高駅前モニタリングポスト)と、現在私たちが住んでいる郡山よりも低くなっている。しかし、小高は未だ原発風評被害の影響下に置かれている。

これまで小高を支えてきた産業のなかで、原発は非常に大きい。しかし、これから脱原発依存を意識していかなければならない小高にとって、原発にとって代わる産業の存在は必要不可欠である。私たちDRMは、その産業が、歴史や文化財を主体にした観光業にあると考えている。小高には大悲山の仏像、小高神社を筆頭に、浦尻貝塚、天野家住宅、高鳥家の蔵等の①魅力的な歴史的財産、②自然豊かな環境、そして江戸時代に相馬中村藩によって育まれた野馬追という③素晴らしい文化がたくさんある。そのため、観光業を軸としての復興は実現可能性が高いと考察する。DRMは機会がある限り小高の魅力を発信し、小高の復興に微力を添えられたらと考えている。